

## 漢字という表意文字の持つ力 —和製翻訳語の凄さ—

会社生活を終えた昔の仲間が集まって「研究会」を開いています。3ヶ月に1回集まり、各自が興味をもって研究してきたテーマで1時間ほど話します。メンバーは、1970年代～1980年代にNKKで一緒に研究を行っていた「溶接研究室」の有志8名。年齢構成は80歳代2名、70歳代3名、60歳代3名です。

これまで発表された研究テーマは、「古代史の実像」「明治という時代」「フランスはどういう国か」「ダークマターと隕石の衝突」「宇宙論」「暗黙知」などです。

現役時代に発揮されたメンバーの好奇心はいまだ衰えず、研究会では、つぎつぎと新しい世界が展開されていきます。

最近の研究発表で、すごいことを教えてもらったのは、「幕末の翻訳者」の話でした。津山藩の蘭学者である宇田川榕庵の翻訳に驚きました。Kさんの研究成果でした。

水素、酸素、窒素、炭素、白金といった元素名、  
酸化、還元、溶解、分析といった化学用語、  
細胞、属といった生物学用語

を作ったのが、宇田川榕庵とのことでした。

宇田川榕庵は、1798年（寛政10年）生まれ、1846年（弘化3年）没。明治元年が1868年ですから、完全に江戸時代の学者です。

訳語を、じっくり見てみると、用語の深い意味が解らなければ、翻訳はできないことがわかります。そのことに気が付いて、すごいなあ、と深く感動しました。

宇田川榕庵は、用語の物理的意味、化学的意味を完璧に理解した上で、漢字でその意味を表現するという離れ業を行っています。「酸化」や「還元」というのを解っていたのでしょうか。化学反応式は知っていたのでしょうか。きっと解っていたのでしょうか。でなければ、こんなすばらしい翻訳はできなかったと思います。それに、これは**翻訳であります**が、同時に**造語**でもあるのです。

これらの造語は、中国でも使われているそうです。

この時代（江戸時代）に、物理学・化学・生物学を、日本人学者がここまで理解していたのですね。日本人の学問に対する好奇心と理解力に感動します。ノーベル賞受賞者が日本人からたくさん輩出されるのも、江戸時代からの伝統があったからではないかと思ったりもします。

加えて、漢字の凄さを、Kさんは、「水村美苗さん（小説家・評論家）の言葉」を用いて教えてくれました。

- ・西洋語という新たに登場した＜普遍語＞を翻訳するのに、漢字という表意文字ほど便利なものはない。漢字は概念を表す抽象性、さらには無限の造語力をもつ。
- ・言語学者による翻訳を通じて、日本の言葉は、世界と同時性をもって、世界と同じこと（普遍語に蓄積された知識や技術の叡智）を考えられる言葉へ変身。
- ・漢字文化圏の地域が、西洋の植民地にならなかったのは、漢字に西洋語を理解、翻訳、吸収するだけの力（圧倒的な語彙数の多さ）があったから。

なるほど、と思いました。流行語で言うと『そだねー』です。

上記の宇田川榕庵の他にも、すごい和製翻訳語・造語がありました。

西周（にしあまね：1829年生まれ、1897年（明治30年）没）

権利、芸術、理性、科学、技術、心理学、意識、知識、概念、帰納、演繹、定義、命題

福沢諭吉（1835年生まれ、1901年（明治34年）没）

自由、経済、演説、討論、競争、抑圧、健康、楽園、鉄道、文明開化

**先人の凄さと漢字が持つ力に感銘を受けます。**

